

男女平等の原点を学ぶ

山城4回 神谷治美

(京都学園大学名誉教授)

昭和二十三年の十月に私は山城高校の併設中学三年に編入し、そのまま高校へ進学し、三年後に卒業しましたが、あの頃の混乱振りは私より三、四年上から二、三年下の人にしか理解できないでしょう。

終戦直後の昭和二十一年の四月、地域制がなくなり、希望する女学校へ入学しました。自垂の美しい校舎、伝統ある重厚な校門、取り澄ましたお姉様方の上級生に圧倒されましたが、初めての電車通学はとても嬉しいものでした。京都で唯一温水プールがあるということに憧れていましたが、進駐軍に接収されていて、結局一度も水に入ることすらできませんでした。

ところが、二十二年に始まった学制改革(男女共学、六・三・三・四制)により、一年下の人からは義務教育として地域の中学へ全員行くことになり、私達の下に下級生がくること

はありませんでした。いつまで経っても最下級生で、それは高校の二年生になるまで続きました。そして女学校の三年生の秋に突如として、女子も男子も公立へ入っていた者は地域の公立高校にあつめられました。私の学年だけはその高校が併設した中学に押し込む形で無理矢理移動させられ、親しくしていた友達とも離ればなれにさせられ、悲しい気持ちで一杯になりました。

さて、山城高校で私たちには元銃器が収納されていたという、運動場の北側の通称「鳥小屋」が教室となりました。女学校に比べてあまりにも汚いのと、男子生徒の粗野で乱暴な言動に最初はとまどうことばかりでした。想像の中でしかイメーajしていなかった男性像とはあまりにも食い違っていたのに幻滅してしまったのを覚えています。

しかし男女が同じ教室で、同じ教科書を使って勉強すること始めての経験でした。能力のレベルはまちまちで、すごく進んでいて、熱心な人もいれば授業中後ろの方でしゃべりながらお弁当を開いている人もいるという雑然としたものでしたが、平等教育は現在より徹底していたと思います。名簿も勿論男女混合でしたし、進学コース、商業コース、家庭コースに分かれており、私は進学コースを選択したのですが、数学や化学、物理、英語などは男女の区別なく能力別に分けられており、大学

への進学希望者は本人の希望するクラスに入ることが出来ました。この中学・高校時代の三年半の間に私は男も女も性差ではなく、意欲と能力によって生きる道を夫々が選ぶべきだという事を学んだような気がします。

私はその後、大学、大学院へと進み、社会人となってからも教育と研究の生活をずっと続けてきました。その間に結婚し、子供も生み育ててきましたが、社会ではまだまだ男女の差別的な取り扱いが強く残っており、家事や子育てをしながらの研究生活では随分と不利益も蒙りました。男性に比べて、家庭を持つ女性には研究や業績を積む時間が圧倒的に少ないからです。しかし、これまで仕事と家庭を何とか両立してこられたのも、女性問題やジェンダー問題に関心を持ち、研究してきたのも、高校時代に培った自由で伸び伸びとした雰囲気や楽天的な性格を形成し、何事も諦めずに頑張つてやれば、男女に差はないという考えがこれまで継続してこられたのだと思います。これは高校時代に自由で平等な教育を受けたということが原点になっているからではないかと思えます。



山崎 14 回 岡本嘉雄